〔武家義理物語四〕せめては振袖著て成とも
猪之介はみるもかなしく、せめては井の水を釣あげ、摺鉢の音さへ去のびて、せつなきけふを暮し、○略下

〔世間娘氣質一〕百の錢よみ兼る歌好の娘
もとより琴をひき歌の道に心ざしふかく、萬花奢なる行かた、摺鉢のうつぶせなるを、富士にうつせし燒物かとながめ、○略下

〔和漢文操二〕鵜舟遊覽　梅長者
今は俳諧の物數寄より、鵜ぶねに麥飯と思ひよれば、闇のとろゝも面白からんと、片荷は菅むしろに竹筒をくゝり、片荷は摺鉢をあみに入て、摺小木も取添たれば、名にあふ長良の夕涼に、人もあやしとや見るらん、

〔三省錄附言四〕明和九年大火のとき、江戸中うりありきたる文に、　大火事相場あらまし、○中略

一すり鉢　大貳百三拾貳文　中百七拾貳文　小八拾貳文

〔寶藏四〕摺鉢
もの有、たまにあらず、石にあらず、かはらにあらず、其形富士をあふのけたるに似たり、其聲車のとゞろくがごとく、雷のわたるにたり、つねにかまかくになれて、世にたやすきやうにおもはるゝといへども、王公も此やしなひをまたずといふ事なく、もつとも精進一大事の味を調せるにこそ、

〔風俗文選拾遺二〕摺鉢摺小木の辨
摺鉢は備前の土を最上とす、其形口ひらき底すぼみ、肌は堅ざまに刻みめ有り、ひつくりかへせば富士山に似たり、富士山汝に似たるか、汝富士に似たるか、汝富士に似ん事を欲せず、富士又汝